昭和三年二月十六日第三種郵便物認可　毎月一日一回發行

聖書の眞理（四）

第六十五號

三月號

主筆　江原萬里

御製を拜讀して　主筆
舊き人　主筆
信仰と愛　主筆
我が國現代の思想的混亂　江原萬里
イエス・キリスト　江原萬里
特權階級の憎惡
民衆の離反（上）
イエスの權威について（下）　森本慶三
柏木通信　齋藤宗次郎
或る青年に　江原萬里
內村鑑三先生逝去三周年
身邊漫筆

昭和八年(1933)三月一日發行

內村鑑三先生逝去三周年

先生逝去されて爰に三年、驚くべきは世の激變である。殊に我國の有樣の凄まじくも變り果てたる。先生若し今此の有樣を見られたならば、どの位驚かれるであらうか。悲しまれるであらうか。痛憤されるであらうか。而して何と云ひて我等を勵まし、將來の希望を示されるであらうか。我等が今聞きたきは預言者の聲である。

世は益々混亂を增しつゝある。歐洲に於ては獨佛の關係益々陰險となり東亞に於ては沃雲滿洲の野を覆ふ。平和主義者たちの熱心なる平和への努力にも拘はらず、世界は激流を棹さして瀑布へと突進しつゝある。殊に我國の有樣は暗中への飛躍である。一體滿洲を生命線として之を死守する我が國の前途はどうなるであらうか。

借問す、內閣の諸公、軍部の諸將軍、產業の指導者、教授聯盟の博士たち。我が國の行動を萬世に亘り義しとする正義の確信ありや、あらば今少し親切に我等國民に教へよ。國民は我が國の發展を歡呼し乍ら、今や世界の全輿論が我が國の行動を非なりとする事を知つて疑惑を懷き始めて居るのである。一體財政と沒交涉なる軍備に何の成算ありや。饑餓に泣く農村は果して救はるべきか。我等國民は何に信賴し、何を目的に生くべきか。諸卿明に之を知り給はば、明に告げて我等國民を導け。

私は今に至つて內村先生が十年前唱道されたキリスト再臨の眞理を深く感ずる者である。今や世は其の不信仰を審判かれて居るのである。今後益々暗黑が全地を覆うであらう。我國にて明に豫期されることは社會全體に道義の頽廢である。人の心の內部の腐敗が今後無遠慮に社會の表面に瀰漫するであらう。每日の新聞、每月の雜誌を見よ。どこに正義の聲がある。そこに在るものは暴力の讃美と肉慾の耽溺である。人心は益々荒び、人生に喜悅なく、家庭は砂漠の如く、社會は動物園となり、不安恐怖、爭鬪は日に滋く、自殺頻々。滿洲や上海であれだけ人を殺し合つて其の効果が顯はれない事があらうか。此の時に當り基督者の眞價も亦明白となる。而して眞の基督者は苦難の中にキリストの救を知るであらう。

聖書之眞理
昭和八年三月一日發行
第六十五號

御製を拜讀して

戰の噂しきりに聞え、國民みな戰爭熱に浮かされつゝある今日此の頃、我が國を知ろし召す天皇陛下の新年の御歌を拜讀して、私は大御心の有り難さに感激した。今の我が國民中果して何人が最も善く陛下の御心を解し、之に副ひ奉り得る者ぞ。我等基督者ではあるまいか。

天地の神にぞ祈る、
朝なぎの海の如くに
波たゝぬ世を。

『天地の神にぞ祈る』。然り、眞の平和は只神にのみある。『我は光をつくり、又くらきを創造す。我は平和をつくり、また禍害を創造す。我はエホバなり。我すべて此等の事をなすなり』(イザヤ書四五・七)と云ひ給へる天地創造の神に祈りてこそ、平和は來り、擾亂、鬪爭、掠奪、殺人の世界は『朝なぎの海の如くに波たゝぬ世』となる。

海は元來狂風に吹き捲られ、波浪天を衝き、須臾も動いて止まないところ、即ち今の世を意味する。然かも又海は底知れぬ深淵、暗黑の領土、即ち我等の心の奥底に潜む罪惡を象徴する。海は我等の心の暗黑であり、且つ我等の社會の動搖である。我等の心の最深部から湧き出る罪の結果が我等の社會の混亂となつて居るのである。我等は皆其の風浪に弄されて居るのである。(詩篇一〇七篇二三——三〇參照)。

誰が此の海を『朝なぎの如く波たゝぬ世』とはなし得る。それは義の太陽が旭の如く我等の心の深淵を照し、我等を神に對して義とし、如何なる患難にも神の終局の御救を信じて疑はず、其の榮光を望みて喜び、思念に過ぐる平安あらしめ給うて始めて可能である。即ち、神の子イエスキリストを信ずる信仰ありて平和は世に來る。

舊き人

『舊き人』、即ち有つて生れた自然人はいつまで立つても新らしくはならない。其の中に内在する罪の故に死滅するのである。『一たび死ぬることと死にてのち審判を受くることは人に定まれり』（ヘブル書九・二七）である。之を修養により培ひ、外を美しく飾つても此の世限りである。文明とは此の『舊き人』の上を被覆した裝飾に過ぎない。衣は古びる。やがて滅びる。

然るに我等キリストに在る者は新らしき創造である。我等の中に此の世ならぬ全く新らしいものの存在を自覺する。外なる『舊人』が丁度百合根のやうに剝奪する時内から萠え出る新生命である。それはキリストに由つて新らしく與へられた生命である。此が死後に生き延び、來るべき御國に榮光の復活をなすのである。我等の朽つる肉の中に此の寶を有つか有たぬかは、我等の生活上最大關心事である。百萬の富何の益ある。宰相の位何するものぞ。過ぎゆく此の世の博識何にかなる。

信仰と愛

我等は我等の善き行を以て神に義しとされ得ない。何となれば我等は神の前に誇るに足る善行を爲し得ないからである。それ故我等は人を愛する愛を以て神の前に義しとせられない。我等の愛は不純であり、ちき傷き易いことを知る。只信仰のみ、然り、神の御獨子、主イエスキリストを信ずる信仰に由つてのみ、神は我等を義人なりと看做し給ふ。

何故キリストを信ずる信仰は道德の成し能はない事をなし、我等を神と義しき關係に立たしめ得るか。それは此の信仰に由つて始めて我等は眞實の愛の何たるかを經驗し得るからである。寸毫も正義に悖らず少しの不純もなき神の無私の犧牲愛に抱擁され、我等は始めて人に對する義しき愛を懷き、神が我等を愛し給ふやうに我等も亦人を愛せんとするに至る。眞實の愛はキリストの十字架の死を知らずしては感知し得ず、永遠の愛の生命の泉はキリストを信じて始めて我等の中に湧き出づる。

我が國現代の思想的混亂

此の程私は、東大法學部教授、法學博士某君が昨夏雜誌改造誌上に載せられた『現代の思想的アナキーと其の原因の檢討』を讀んで、我が國の思想の混亂、物質偏重マルクス主義の跳梁の有樣の記述に尠からず同感した。然るに此が原因をプロテスタント主義に歸し、

我が思想界の缺陷は畢竟するにプロテスタンチズムに由來すると云ふも、必らずしも春秋の筆法の非難を受けないであらう

と斷定し、之が匡正の道はカトリック主義の採用に在りとし、『此の狀態を正しき軌道に導き、思想界及び延ひては社會的秩序を回復するのは、中世記的自然法の思想の現代への適用を惜いて他に求め得ぬのである』との結論を讀んで、頭腦明晰なる法學者にして熱烈なるカトリック教徒と自他共に許す同君の此の一見堂々として該博なる論說が、無殘にも布教に熱心なる『加持力』のために禍されて居るのを惜しんだ。議論に致命的矛盾があり、其の結論は逆立して居る。

同君は我が國の現代に於ける思想的アナキーが我が國特有の事情に依つて特に激化されて居る事を述べ、『此の事は未だ充分に識者の注目を惹いて居ない。勿論漠然たる言は往々繰返されて居る』と云ひ、基督教徒が『爲政者が西洋の物質文明は之を歡迎するに遑ない程であつたが、然し其の根抵となつて居り、其れが有機的に發達した基督教の信仰或は宗教心は之を歡迎せず……其の有害なる果實を結んだことを主張し來た』ことに、『全く贊成である』と云ふ。若し然らば我が國の思想的混亂の原因は基督教にない事は明である。

然るに同君は『我が社會の思想的病弊の根源を一層立ち入つて分析し、此等の主張の基礎付けを試みやうと思ふ』と云ひ、我が國に於けるプロテスタント主義の弘流の有樣を觀察して『要するに我が國に於けるプロテスタンチズムは……それが外見上相當弘まつて居るにも拘はらず、其の範圍内に於ても血となり、肉となつて居ない』

と斷定されて居る。かやうに勢力薄弱なものがどうして同君の此の論說の基軸である『我が思想界の缺陷は畢竟するにのプロテスタンチズムに由來する』と云ひ得やうか。之に『由來すると云ふも必らずしも春秋の筆法の非難を受けないであらう』か。春秋の筆法とは直接の行爲者でない者を道德上罪責ありとする論法である。若し法律學者たる同君が裁判官となつて、『お前の犯行は薄弱である。然るに社會の此の禍害は畢竟するにお前の犯行に由來す』と云ふ判決をしたならば如何、とんでもない裁判である。同君の前提からの當然の結論は、我が思想界、學界は歐米の皮相なる思想の代りに、其の根抵であるプロテスタントの信仰を熱心に受容れなければならないと云ふべきである。それを罪はプロテスタント主義にあるから、之に代ふるにカトリック主義を以てせよと云ふは何人にも明白な曲論である。

同君が我が思想界に『アリストテレスより聖トーマスを經て我々に傳へられたる正義の觀念、自然法の根本原則』の研究を提唱された事は私も贊成である。然し乍ら此のトマス・アキナスの中世スコラ哲學の布衍であるレオ十三世のレールム・ノヴールム、次で之を補足したピオ十一世のクワドラジエジモ・アンノなる社會政策に關する教書が我が國現時の思想的危篤狀態に對する唯一の起死回生藥であるとの口吻は餘りにも『加持力』である。元來歐洲暗黑時代蠻人教化の偉績を遂げたロマ教會は今に至るまで人間を蠻人扱ひ、少なくとも子供扱ひにして居るとの非難が絕えない。現時獨逸の社會主義者達が馬鹿にしててんで一顧だにしない此の教書が、彼等の思想的感化を受けること甚大なる我が思想界の病弊をどうして醫し得やう。我が『思想界延いては社會秩序を回復するのは』此の『適用を惜いて他に求め得ぬのである』とは情けない結論である。

私は思想の無統制を憂へない。思想は多種多樣だけ善い。憂ふべきは道義の頹廢である。之が匡正は各人各自其の心中に正義の神と義しくある以外にない。即ちパウロ、ルーテルに歸ることである。然り古來幾度か社會を根抵から改革した聖書を我が國民の書物とするに在る。

イエス・キリスト（六）

江原萬里

一二　特權階級の憎惡

もろもろの人をてらす眞の光ありて世にきたれり、彼は世にあり世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。彼は己の國にきたりしに、己の民は之を受げざりき。（ヨハネ傳一・九、一一）

前にも述べたやうに眞の人にして且つ神の子なるイエスが此の地上に建設し給ふ神の國は、人々をしてイエスの如き罪なき眞人間たらしめ、イエスが父なる神に仕へ給ふやうに神と義しき關係に立たしめ、即ち、神の子たらしめ、以て此等の者が相互に睦む地上永遠の平和、歡喜、公平、正義、愛の聖社會である。イエスの教は此の神の國の教であり、彼の病者治癒はその恩澤の溢れであつた。

ハルナックはイエスの福音を要約して次の三項としたつた。

一　神の國、其の來りつゝあること。

二　父なる神、人の靈魂の無限の價値。

三　優れたる義、愛の誡命。

此の三者は相互に關連して居る。第一の神の國の何たるかは、第二の王及び民の性質如何、第三の其の間の義しい關係が明瞭となつて始めて知られ、其の到來が人間至上の福祉であることがわかるのである。イエスがガリラヤで教へ給ひ、且つ事實に由つて之を示し給うた神の國の到來は、何よりも先づ人間の靈魂は何人の靈魂も、人が人である限り、其の創造主なる神に於て無上の價値があり、神は之を父の愛を以て愛し給ふと云ふことであつた。

汝ら如何に思ふか。百匹の羊を有てる人あらんに、若しその一匹まよはば、九十九匹を山に遺しをき、往きて迷へるものを尋ねぬか。もし之を見出さば誠に汝らに告ぐ、迷はぬ九十九匹に勝りて此の一匹を喜ばん。斯のごとく此の小き者の一人の亡ぶるは天にいます汝らの父の御意にあらず。（マタイ傳一八・一

二)。

ブラウニングは歌つた

わが企てて達し得ざりしところ、
わが衷に在り人々の顧みざりしところ

それが、神にわが價値あるところ。

假令才能なく、德なく、自分で自分を賤しめ、財產なく、地位なく、人から輕ろしめられても、神は無限の愛を以て我等を愛し、我等の衷に在る靈魂に無上の價値を認め給ふ。それ故に神の愛の下には一天萬乘の君主も裏店の無產者も何の差別はなく、文明を誇る歐米人もアフリカの原始林の土人も悉く平等である。富と能力と智慧との差違は神の愛の前には何の益にもならない。否、白痴、不具の子程親には憐憫あり、愛は濃かであるやうに、神は罪のため不幸悲慘に陷つた者を憐れみ給ふのである。イエスは此の眞理を敎へ、事實に於て之を示し給うた。そしてかく神は我等を愛し給へば、我等も亦そのやうに相互に相愛すべきであると敎へ給うたのである。

此の敎を聞いて最も驚喜した者は、今まで富者、權力者、異性の暴虐に抑壓され呻吟して居た貧者、弱者、病める者、婦人等であつた。當時人々から賤しめられ社會から排斥せられて居た取稅人——彼等のうちにはそれに相當する人物が多かつた。娼婦、癩病人、サマリヤ人、此等が卒先してイエスの敎に感激し、隨喜した。

イエスその弟子とともに海邊に退き給ひしに、ガリラヤより來れる夥多しき民衆も從ふ。又ユダヤ、エルサレム、イドマヤ、ヨルダンの向の地、ツロ、シドンの邊より夥多しき民衆その爲し給へる事を聞きて御許に來る。(マルコ傳三・七、八)。

今やガリラヤに信仰の大興隆あり、ユダヤ全國のみならず、近隣諸地方の民衆も之を聞き傳へて參集し、『神の國運動』が起つた。それは宗敎運動であつたが、又同時に大社會運動でもあつた。社會に於ける不平等の徹廢、暴虐壓制の匡正、貧者窮者の救恤運動であつた。

想像力のある者は、若しかやうな運動が現代の我が國に今起つたと假定して、之がどんな結果を產むであらうかを想像して見よ。智慧に輝き、能力に滿ち、其の言は

民衆の肺腑を衝き、心から之を感奮興激せしめずば已まない力があり、其の行は善美にして義しく、恩惠は朝の光の如く惱める者を照す、かやうな偉大なる聖者が今出現し人は皆神の御前に平等であつて、貧富、貴賤、賢愚の差は人が人として有つ品位については全く無効であると宣べ、各人皆互に平等に神の愛子として之を尊敬し、兄弟の愛を以て遇し、自己の利益のため之を機械として使用するなと呼號したならば如何、是明に社會的大革命運動であり、之に對して大反動は必ず起る。果然イエスに對して反對が起つた。

此の「神の國運動」が盛となればなる程、益々不安を感じた者の第一は富者であつた。第二は官憲であつた。第三は學者であつた。彼等各々自分の保有する特權地位、思想からして、イエスを憎み　かゝる運動を撲滅し其の巨魁を除かずば、何よりも自分自身の存在が脅かされると思つたのである。

然かも神の絶大の愛を敎へ、それを身自ら示して貧しきを憐れみ、病めるを癒し、虐げられたるを起し給ふたイエスを、朝にはホザナと歡呼として迎へた、此等の民衆も亦夕には之を十字架に釘けよ、我にはバラバ（强盜の名）と叫ぶに至つた。何故か、イエスに何等かの罪があつたためであらうか。否、彼は神の愛を以て彼等を愛し、その極までも之を愛して、愛する者のために捨てられ、憎まれ、殺され給ふたのである。ここに全人類の深刻なる罪の事實は白日の下に明に曝露された。人は皆神を拒み、その敵となつて居る事が明にされた。此の罪、此の罪のある間は人類の將來は絶望である。神の國は地上に實現し得ない。私はイエスが如何に全人類のため殺され、十字架に死し給ふたことに由つて此の罪を贖ひ給うたかを說く前に、先づイエスは如何に彼等から憎まれ、捨てられ、殺されるやうになり給うたかを說かう。

富める者

イエスの敎は徹頭徹尾、人は何人と雖も人である故に貴く、其の靈魂は神には無上の價値あり、神は父の愛を以て何人をも偏頗なく平等に愛し給ふ、それ故かやうに

愛せられる我等も亦その如く隣人を愛しなければならないと云ふに在る。神の國とはかゝる愛の國である。イエスは今の社會に在つて自己の能力を誇り、人を差別し己は傲然と高く持し、巨萬の富を擁し、日々贅澤三味に暮し乍ら隣人の困窮を顧みず、公共の益を念とせず義者を助けず、不當に弱者の利益を搾取する事の神に對する大罪惡である事を說き、かかる者を痛烈に攻擊し給ふた。

イエス若し現代に現はれ給ふたとせば現代の富者、資本家の罪惡を假借し給はないであらう。彼等は自分の所有する資本がなくては產業は經營せられず、從つて民衆の生活に必要なものを生產する事は出來ないと云つて自分の位置は擁護するであろう。然し乍ら彼等が資本を所有し、產業を經營する主たる目的は營利である。なるべく多くの純益を收めることである。決して多數の勞働者に食を與へることがその主なる目的ではない。その勞働者を傭ふ事は器械を購入する事と何の異なるところなく、只其の勞働力を買ふだけの事である。これを人格者として尊重せず、まして之を產業の目的としない。此の產業方法が決して神の國に相應しいものでないことは明である。

富者は又自分の浪費を辯護して云ふ、自分たちがかやうに贅澤をなし、多數の使用人を傭ふ故に、それだけ多くの人に職を與へ得ると。然し乍らそのため働いた勞働は社會一般の益とならず、只富者の肉慾放恣を助けるのみである。之が何の公益ぞ、富者にして若し公益を思ふならば他に其の富を使用する方法は幾らでもある。故にイエスの神の國の出現に由つて除外せられる者にしてかゝる富者の如きはない。

イエス弟子たちに言ひ給ふ。『まことに汝らに告ぐ、富める者の神の國に入るよりは駱駝の針の孔を通るかた反つて易し。（マタイ傳一九・二三、二四）

彼等は財產に賴つて、義しき生命の源なる神に賴らない。富に仕へて神に仕へず、隣人を憐れまない。

なんぢの財寶のある所にはなんぢの心もあるべし。

……人は二人の主に兼事ふること能はず、或はこれを憎みかれを愛し、或はこれに親しみかれを輕しむ

べければなり。汝ら神と富とに兼事ふること能はず（マタイ傳六・二一、二四）

イエスは己が得たる富を公益のために使用せず、自分の老後の安逸のために汲々として之が蓄財に餘念のない者を痛烈に罵倒し給うた。

ある富める人、その畑豐に實りたれば、心の中に議りて言ふ。『われ如何にせん、我が作物を藏めおく處なし……わが倉を毀ち、更に大なるものを建てて其處にわが穀物および善き物をことごとく藏めん。斯てわが靈魂に言んは。靈魂よ、多年を過すに足る多くの善き物を貯へたれば安んぜよ、飲食せよ、樂しめよ』。然るに神（死の床に臨み）かれに、『愚なる者よ、今宵なんぢの靈魂とらるべし。然らば汝の備へたる物は誰がものとなるべきぞ』と云ひ給へり。己のために財を貯へ、神に對して富まぬ者は斯のごとし。（ルカ傳一二・一六、二一）

只蓄財、そのために貴き一生を不義理に過して之を世のため、人のために献げない。かくして貯へ得たる財寶は一體誰のものとなる。子孫の柔弱放蕩のためか、はた社會の大變動を招致する爲めか。一生の勤勞は空しく而してその靈魂は貯へ得たる黄金を以て神の祝福を買ひ得べくもあらず、飢えて痩せる。『愚かなる者よ、今宵なんぢの靈魂はとらるべし』である。『とられたる』靈魂の往先きは何處か。

或る富める人あり、紫色の衣と細布とを着て日々奢り樂しめり。又ラザロと云ふ貧しき者あり、腫れ物にて腫れたゞれ、（多分癩病にて）、富める人の門に置かれ、その食卓より落つる物にて飽かんと思ふ。（只思ふだけ）。而して犬ども來りて其の腫れ物を舐れり。遂にこの貧しきもの（野たれ）死に、御使たちに携へられてアブラハムの懐裏に入れり。富める人も死にて（盛大なる式をもて）葬られしが、黄泉にて苦惱の中より目を擧げて遙にアブラハムと其の懐裏におるラザロを（驚いて）見る、即ち呼びて云ふ。『父アブラハムよ、我を憫みてラザロを遣し、（焔は消されずとも、せめてパンの一屑にも似たる）その指のさき

を水に浸し我が舌を冷させ給へ。我は焰のなかに悶ゆるなり』。（ルカ傳一六・一九―二四）

生前奢澤三昧に一生を送り、貧者に對して何の顧慮するところなかつた者は、何日か良心の大なる苛責を感ずる。その靈魂は「焰の中に悶ゆる」時が來る。然るに彼等の多くは富を有つ事によつて安心し、之を有つ事で社會に於て優越を感じ、其の優越感によつて生き甲斐ありとする者である。若し其の富は神の前には無價値であり之によつて義とされない事が事實として顯はれんか、彼等は驚愕惜くところを知らないであらう。今やイエスの神の國の教とそれに由つて惹き起されたガリラヤに於ける宗教的大運動が彼等の地位を脅し、將さに之を覆へさうとする狀勢となつたのを見て、彼等はイエスを危險人物視し、極力之を排斥するに至つた。富を神として之に仕へるものは到底イエスを受容れない。彼に身を委ね奉り眞の神を父として仕へることは出來ない。彼等はいつかイエスが邪魔になり、之を殺そうとする。今も昔も同樣である。今こそ基督教は俗化し富者の鼻息を窺ふやうになつたが、眞實彼によつてのみ生きる者は現社會に對して爆彈勇士である。

權力者

イエスの說き給ふたところは何人も神の愛の下には平等であるから、神に愛せられた我等は、その如く何人をも偏頗なく愛しなければならないと云ふ事であつた。イエスは決して社會主義者、共產主義者のやうに、財產の公有、所得の平等分配を主張し給うたのではなかつた。イエスは社會階級そのものゝ存在を否定せず、貴族を廢し、一切の上下の差別を撤去しやうとし給はなかつた。何人をも平等の立場に引下ろすことがイエスの教の主旨ではない。何人をも神の愛の下に平等の立場に引上げるのがその目的であつた。それ故イエスは人の上に立つ者は其の地位其の權力を自己のために使用せず、却つて己が下に居るもののために仕へる精神が必要であると教へ給ふたのである。

我等は富を有てば有つだけ、其の富について社會に對

し責任と義務とを負ふ。學問があればあるだけ、能力があればあるだけ、その學問才識を以て公共のために盡さねばならない。己の位置が上れば上るだけ、益々多數の人を使用すればするだけ、それだけ自分はそれ等の人の主人でなく僕であらねばならない。一家の主人は一家全員のために仕へ、事業主は其の使用人全體のため、一國の首長は國民全體の公僕たるべきである。イエスはかく教へ給うた。

異邦人の君のその民を宰どり、大なる者の民の上に權を執ることは汝らの知る所なり。汝らの中にては然らず、汝の中に大ならんと思ふ者は汝らの役者となり、首たらんと思ふ者は汝らの僕となるべし。斯のごとく人の子の來れるも事へらるる爲にあらず、反つて事ふることをなし、又おほくの人の贖償として己が生命を與へん爲なり。（マタイ傳二〇・二五―二八）

神の國の王たるイエス御自身は絶對の權力を以て其の民を屈服せしめるものでなく、反つて民に事へ、其の罪惡の贖償として自ら生命を提供し給ふのである。されば此の神の國にては權力を執る者、政治家、行政官、人の長たる者は悉くかかる精神を必要とする。若しイエスの王たることが人々に認められ、かかる思想が社會全般にゆきわたつた時、現在の支配者とその代理人とは一日も其の位置に安閑たることを得ない。されば神の國運動が盛大となるに從ひ、先づガリラヤに於て『ヘロデ黨の人』がパリサイ人と結託し、イエスを亡ぼさんと謀つた（マルコ傳三・六）。次でエルサレムに於て祭司たちが驚愕し、若し此の儘に放置せば必らずロマの叱責を受け、自分の位置を失ふであらう事を恐れ、偏狹なるパリサイ人をそそのかし、ロマ總督の柔弱に乘じてイエスを殺すに至つたのである。

ここに祭司長、パリサイ人ら議會（當時の最高宗教及び行政機關）を開きて言ふ。『われら如何に爲すべきか、此の人おほくの徴を行ふなり。もし彼をこのままに捨ておかば、人々みな彼を信ぜん。而してロマ人來たりて我等の土地と國人とを奪はん』。その中

の一人にて此の年の大祭司なるカヤパ言ふ。『なんぢら何をも知らず、ひとりの人、民のために死にて國人すべて滅びぬは汝らの益なるを思はぬなり』

ヨハネ傳は此の言中の深意を認めて之を說明して云つた

これは己より云へるに非らず、この年の大祭司なれば、イエスの國人のため、又ただに國人の爲のみならず、散りたる神の子らを一つに集めん爲に死に給ふことを預言したるなり。彼等この日よりイエスを殺さんと謀れり。（ヨハネ傳一一・四七—五三）。

學者

イエスが教へ給うた、人は何人も神の愛の下には平等であり、人間の靈魂は神には悉く無上の價値があるとの眞理は、只單に社會の不平等の上に己が利益を有つ富者、貴族、政治家等に至大の脅威を與へたのみでなく、當時ユダヤ教の精髓を把握し、神聖なるイスラエルの民の國體の擁護を以て自ら任ずるパリサイ人を憤慨せしめた。彼等はイエスの教を以て危險思想とし、イエスを以て神聖なる神の民の賊とし、神の尊嚴を輕んずる冒瀆者とした。

由來ユダヤ人は自ら神の特選の民を以て任じ、萬國民に其の優越を誇る者である。彼等は神から特別の使命を負はされ、萬國民に神を知らしめ、之を教へ導く任務を有つと確信し、此の萬國に比類なき國體とその淵源である宗教の純正とを維持するためには死を辭しない者であつた。比類なき國體の神聖を護り、之が淵源である宗教の純正を確保する途は、神がモーセを以て彼等に與へ給うた律法を遵守することである。之に神の聖意の全體がある。之を學び、之を實行すること是、神の民たる特權であり、義務であるとした。

然るにユダヤ人の根本憲法たる此のモーセの十誡は、神は道德的人格者であり給ひ、神に仕へることは道德を遵守することであることを明にしたものであるが、それは人々の行爲の大綱を示すに留まり、個々の場合之を適用するには細則を必要とする。例ば十誡第四條の『安息日を憶えて之を聖潔すべし。六日の間勞きて汝の一切の

業を爲すべし。七日目は汝の神エホバの安息日なれば何の業務をも爲すべからず』とある。然らば安息日に爲まじき業務とは一體何々を云ふか。之を明にする必要上、律法に關して古來の『言傳』が生じ、律法と相併んで重要視されたのである。

神の聖意なる律法の眞意を學ぶことは此の『言傳』を究明することである。言傳を熟知した者が最も善く律法を知り、從つて神を知る者である。丁度最も善く判例を知つた者が最も善く法律を知るものとされると同樣である。而して神の聖意なる律法を遵守することは此等の言傳を悉く文字通りに實行することである。その中の一つに反しても其の事は律法違反であり、從つて神の民として赦すべからざる大罪惡とされ『罪人』とされた。

然るに普通の人民は學者ではない。彼等はモーセの十誡位は安息日毎に會堂で讀みきかされ、暗誦して居るであらうが、之に關する古來の言傳を悉く知る者ではない。それ故之を學習したパリサイ人は特別に神を知る者とされ、彼等は民衆の上に高く己を持し、『律法を知らぬこの群衆は咀はれたる者なり』（ヨハネ傳七・四九）と廣言した。神の民たるユダヤ人として神を眞に知る者は我等だけ。而して我等が之を敎へた者だけと思つた。神に關する智識は彼等の一手專賣とした。ユダヤ人にとつては神を知る知識は此の世の財寶以上に尊重された。それ故彼等は富者以上に尊敬され、富者以上に尊大であつた。

然るにイエスは人は何人も神の愛の下には平等でありパリサイ人、神學者、聖書の研究者、牧師、傳道師ならずとも何人も直接神を知り得る能力あり、神自ら彼等に之を顯はし給うことを敎へ給ふた。

天地の主なる父よ、われ感謝す。此等のことを智き者、慧き者にかくして嬰兒に顯し給へり。父よ、然り、斯の如きは御意に適へるなり。（マタ傳一一・二五、二六）

これは實にパリサイ人には最も危險思想であつた。彼等はユダヤ人が萬國に誇る傳來の神に關する眞知識が無知なる民衆の勝手儘氣な議論のために廢棄されることを恐れた。丁度カトリック敎會が聖書の外に、傳統を重ん

じ、且つ自分の教會公定の教義のみを『眞の宗教』と稱し、之に對して教會員の勝手な議論を許さないのと同樣である。然るにイエスは人は何人も直接神を知り得る能力を認め給うた。ゴアは云つた。

偉大なる教師にして、然り、ソクラテスでさえ、之より深く普通の人々各自の思考力に信頼した者はなく、又之れ以上充分にその能力を働かすやうに仕むけた者もない。

と。ゴアは更に云ふ イエスの問はトンチンカンの事が多い。彼はわかり切つた問に對してはわかり切つた答を與へ給はない。之に對して別の事を言ひ、又反對の問を以て之に答へ給ふた。之は人々をしてその與へられた各自の能力を働かし、内なる光によつて自分自身で解答するやうに仕むけ給うたのであると。

かやうにイエスは如何なる『嬰兒』即ち漁夫や取稅人も學者、パリサイ人等の『智き者、慧き者』に秘せられた神の知識を有ち得ると主張し給ひ、且つ實際其事實を示し給うて、パリサイ人の特權的位置を打破し給うたのである。それ故『律法を知らざる咀はれたる民衆』の上に高く己を持し、『律法のうちに知識と眞理との式を有てりとして盲人の手引、暗黑におる者の光明、愚者の守役幼兒の教師なりと信ずる』（ロマ書二・一九、二〇）彼等はイエスを憎んだ。

イエスが民衆に誰でもわかると教へ給う神は愛の神であつた。何人をも同樣に愛し給ふ父なる神であつた。言傳に縛られて身動きも出來ない樣な規則づくめで奉仕しなければ神に對して忠實でないと思ふやうな神ではない。『われ憐憫を好みて、犧牲を好まず』である。イエスの來り給うたのはパリサイ人の如な言傳に『正しき者』を招かんとにあらで之に反する『罪人』を拔かんためであつた。（マタイ傳九・二三）。

さればイエスは安息日に言傳に由つて『すまじき事』とされて居た病者を度々醫し、床を取上げて家に歸へらしめ給うた。人々は始めて神を知つた。彼が安息日に片手なえた者を癒し給う時、イエスはパリサイ人に向つて且つ問ひ且つ答へ給うた。曰く

安息日に善をなすと惡をなすと、生命を救ふと殺すと孰れがよき（マルコ傳三・四）。汝等のうち一匹の羊をもてる者あらんに、もし安息日に穴に陷らば、之を取あげぬか、人は羊より優ること如何許ぞ。さらば安息日に善をなすは可し（マタイ傳一二・一二）。

かくて之を癒し給うた『パリサイ人いでて如何にしてかイエスを亡ぼさんと謀る』（同一三、一四節）。

假令古來の神聖なる言傳に反しても何善を爲すは可なりとの思想はイエスが實際に之を實行し給ひ、民衆は之を謳歌し、其の思想が次第に盛となり、ガリラヤ全土に及び、首府エルサレムにまで派及するに至つた。

之は明に社會秩序の大變革であつた。爰に於てかエルサレム本部のパリサイ人は彼等の思惟する『眞の宗教』上捨て置き難きことと思ひ、わざわざ人を遣はして其の狀勢を調査せしめる事となつた。イエス傳の著者カイムは此の事實を重視し、此の事たるドイツに起つたルーテルの宗教改革運動が盛となつて來たゝめ、ロマに在るカトリック教會が遙るばる獨乙に人を派遣してルーテルを詰問せしめたと同樣の狀況であつたと云つて居る。

パリサイ人と或る學者ら、エルサレムより來りてイエスの許に集る。而してその弟子たちの中に潔からぬ手即ち洗はぬ手にて食事する者のあるを見たり。……イエスに問ふ。『なにゆゑ汝の弟子たちは、古への人の言傳に遵ひて歩まず、潔からぬ手にて食事するか』。（マルコ傳七・一〇以下）。

此の詰問に答へてイエスは言ひ給うた。

イエス言ひ給ふ。『イザヤは汝ら僞善者につきて能く預言せり。「この民は口唇にて我を敬ふ、然れどその心は我に遠かる。ただ徒らに我を拜む、人の訓誡を教とし教へて」と錄したり。汝らは神の誡命を離れて人の言傳を固く執る』（マルコ傳七・六、七）。

パリサイ人の固守する言傳はモーセの律法を離れ、其の眞精神に背くものであるとの宣言である。此の事がエルサレム本部のパリサイ人を如何に怒らしたかは想像に難くない。イエスはやがて上京し、エルサレムに於て彼等の僞善を痛烈に攻擊し給うた。

禍言なるかな、僞善なる學者、パリサイ人よ、汝らは薄荷、蒔蘿、クミンの十分の一を納めて、律法の中にて尤も重き公平と憐憫と忠信とを等閑にす（マタイ傳二三・二三）。

彼等は律法の形式を重じ、其の精神を等閑にする。外なる行爲が社會的慣行に由つて尊敬すべき紳士淑女の行爲と認められれば、心の中には『貪慾と放從とに滿つる』も之を問はない。一體社會には慣行上一般に大目に見られる罪と毫も許容する事の出來ない罪とがある。例は殺人、强盜、强姦、詐欺、窃盜等の罪は何人と雖も之を犯す時は直ちに捕へられ、之を犯した者は最早社會の表面に立つ事が出來ない。然るに他方罪とは言ひ條、何人にも共通に在り、人間の持前の弱點として看過される罪がある。例ば傲慢、無情、我利、貪慾、不公平等の罪がそれである。此等は決して殺人又は强盜のやうに恐るべきものと見られない。紳士淑女、大官富者の犯す此等の罪は當然とさへ考へられる。

然るにイエスの靈眼には人間の罪は悉く神に對する罪であり、之に輕重がなく、何れも惡い。否、表面は白く塗りたる墓のやうに清らかに見ゆれども、內は死人の骨とさまざまの穢とに滿つる紳士淑女、パリサイ人の僞善は、遙かに娼婦、取稅人の惡行よりも隱險醜惡である。それ故に、

イエス言ひ給ふ。取稅人と遊女とは汝らに先だちて神の國に入るなり。（マタイ傳二一・三一）。

かやうにイエスは人々の職業、地位、財產、權力、學問に由り差別せず、社會一般の風習に拘束せられず、言傳によらず、人の表面を見ず心の中を見、君子と認められたパリサイ人の假面を剝ぎ、其の僞善を曝露し、其の敎は全く神に關する無知を表白するものであることを明にし給うた。而して此のパリサイ敎に由つて自らを神の前に義とする者よりも、己が罪を認め、碎けたる魂を以て神の前に其の赦しを乞ふ娼婦、取稅人の方が遙かに神に義しとせられる事を說き給うたのである。

否、イエスの敎がパリサイ人を激怒させたのは、イエスが啻に彼等の言傳に反對し、憐憫を行ふ事は遙に言傳

を遵守するよりも神に仕へる道であると主張し給うたばかりではなかつた。パリサイ人としては到底默視する事の出來ない大膽なる宣言をなし給うたからであつた。それはイエスは律法に關する言傳なる細則を無視し給うたばかりではない。律法其の者、ユダヤ人の存在の根據、神聖無比、之あるがために萬國に比なき國體とせられるモーセの十誡其の者に對してイエスは敢然之が修正をなし、自分はモーセの律法以上の者である事を主張し給うたのである。若し自ら其人でなくしてかゝる事を斷言する者あらば、死罪はユダヤの法律に照して當然である。律法の純正維持を任務とするパリサイ人がどうして之を默視することが出來やうか。

律法、卽ちモーセの十誡はユダヤ人の存在の根本憲法である。之を犯す者は國賊として處刑せられなければならなかつた。此のモーセの十誡は先づユダヤ人の奉仕すべき神の如何なる方で在し給ふかを示し、神は唯一にして他の何者をも神と等しき者になす事を得ない事を規定し、又安息日制度を規定して、此の日は業務を休み專ら神に仕へる事を命じてある。此等の規定はユダヤ民族の神聖なる國體をなすものであつて、丁度君主國が君主制度を以て其の國の基礎として神聖侵すべからずとするのと同一である。然るにイエスはパリサイ人が何故イエスの弟子たちが安息日にすまじき事をなしたかの詰問に答へて、

安息日は人のために設けられて、人は安息日のために設けられず、然れば人の子は安息日にも主たるなり。（マルコ傳二・二三以下）

と云ひ給うた。人は如何なる制度の目的物でなく、制度こそ人のために存すること、人の靈魂が神に在りてどの位貴重であるかを說いて之程偉大な宣言はない。然かも其を敢て宣言するイエスは安息日にも主であり給ひ、安息日はイエスの精神を以て之を守るべしとの宣言である。イエス若しモーセ以上の者ならずは之は大なる冒瀆である。更らにエルサレムに於ても亦此の大問題が起つた。

ここにユダヤ人かかる事（病者治癒離床）を安息日に

なすとて、イエスを責めたれば、イエス答へ給ふ。『わが父は今にいたるまで働き給ふ。我もまた働くなり』。此に由りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思ふ。それは安息日を破るのみならず、神を我が父といひて己を神と等しき者になし給ひし故なり（ヨハネ傳五・一六、一八）

イエスとパリサイ人との衝突は爰に至つて最早調和妥協の餘地はない。モーセの律法が神の最高にして且つ最終の自己啓示であるならば、而してイエスは只單に人にして神の子、その最高の且つ最終の神御自身の自己啓示であり給はないならば、イエスは國憲を濫り、神聖なる國體を冒瀆し、己を神に等しとさるするものである。イエスを殺さうと決意したパリサイ人は正當である。

イエスは實に神の子なるが故に、而して律法以上に神に義しく、社會國家の制度以上に人を愛し給ひし故に、誤解され、憎まれ、殺され給うたのである。

一三 民衆の離反（上）

民衆ともに叫びて云ふ。『この人を除け、我らにバラバを赦せ』……彼ら叫びて『十字架につけよ』と云ふ。……遂にその聲勝てり。（ルカ傳二三・一八—二三）

かやうにイエスの教へ給うたところは、神の愛の下には人は皆平等であり、何人と雖も神は人の靈魂に無上の價値を認め給ふ，故に各人の人格は如何なる境遇に在り、外は如何に醜くとも何物にも代へる事の出來ない尊嚴がある。人は他人を自分の目的達成の手段とすることなく相愛しなければならないと云ふことであつた。イエスは自ら其眞理を事實に由つて示し給うたのである。而して富者からは他人の靈魂よりも財寶を尊重する貪慾の故に權力者からは人民に仕へるよりも權勢を逞ましうしやうとする利慾の故に、學者宗教家からは人を愛する事が神の最大の眞理である事を知らず、傳統的制度に關する自分の偏見を固執する頑迷の故に、此等社會の各特權階級の人々から憎惡せられ、遂に殺され給うたのである。

イエスの教はかく強者の脅威であり、弱者の福音であつた。貧しき者、虐げられた者、無知なる者、罪に惱める者が之に由つて始めて立ち得る力を見出したのである。されば彼等はイエスの教を聞いて喜び、其の權威あるに驚き、其の醫しの能力に隨喜し、イエスを渴仰してメシヤの出現としたのである。

大なる群衆は喜びてイエスに聽きたり（マルコ傳一二・三七）である。此れ故ガリラヤに大なる宗教運動が起り、それが必然に大なる社會運動となり、社會の被壓者たちはイエスに由つて自分の境遇を改善しやうとし、之に同情する社會改革者たちはイエスを仰いで首領とし、彼等の理想とする社會改革、進んでイスラエルの民の獨立、ロマ帝國の政權顚覆を企て大革命を起さうとするに至つた。『人みな汝を尋ぬ』（マルコ傳一・三七）と弟子たちはイエスに告げた。之が特權階級の疾視となり、其の運動の鎭壓となり、イエスの死となつた事は既に述べた。

然らばかくまでイエスに隨喜し、イエスを救主として渴仰した民衆は最後までイエスに附き隨ひ、其の死を共にしたか、否、福音書を讀んだ者は何人も知るやうに、民衆も亦イエスに失望し、果ては特權階級たる祭司、學者たちの煽動に乘ぜられて、『十字架に釘けよ』と叫ぶに至つたのである。何が一體彼等をして自分たちをかくまで深く愛し、そのために生命を棄て給うたイエスに失望せしめたか。彼等は特權階級の鎭壓のためにイエスから離反したのではなかつた。イエスのうちに何ものか彼等の慾求と到底相容れないものを發見したからである。それ故の失望であつた。それ故果ては「十字架につけよ」とさへ叫ぶに至つたのである。

私は此の事を說明する前に、此等の民衆を二つに分ける必要を感ずる。その第一は民衆の指導者、即ち社會革命家であり、第二は群衆、卽ち現代の新らしい語で云へば無產大衆である。

社會革命家の失望離反

當時ガリラヤは革命思想の巢窟であつた。イエスが出

現の時、即ち紀元三十年頃からエルサレムの陷落の時、即ち紀元七十年までに、幾人の『僞キリスト』が出て民衆を煽動し、社會運動や革命運動を惹き起したか知れなかつた。彼等は皆ロマの支配を覆へし、國を獨立せしめ自らダビデの王位に卽き、正義と公平と憐憫とを以て國を治め、四方を征服して武威を世界に輝す者は我なりと呼號したのである。多分民衆がイエスの代りに其の釋放を求めたバラバも亦此の一人であつたらしい。人々が其の出現を持ち望んで居た救主メシヤ、即ち『ダビデの子』はかやうな王者であつた。

イエスが選拔して十二弟子とし給うた者の中に『熱心黨のシモン』と云ふ者がある。此の『熱心黨』とは元來かやうなダビテ主義を奉ずる黨派であつた。此の黨中其の奉ずる主義からしてイエスに共鳴し、イエスに附き從つた者も尠なくなかつたらしい。シモンも亦最初はそう云ふわけでイエスの弟子となつた者であらう。やがて彼がイエスの精神を理解し始めるに從ひ、自分の豫てから奉じた主義との矛盾を知り、飽くまでイエスに附き從はうとすれば從前の黨と其の同志とを棄てなければならない事に思ひ至り、他の弟子たちにない人知れぬ苦勞があつた事と思はれる。丁度共產主義者が其の主義を捨てゝ基督者となるやうに。

今やイエスのガリラヤ出現により、かやうな社會革命主義者は翕然としてイエスの許に馳せ參じ、『來るべき者』は彼なりとし、彼等の理想をイエスに由つて實行しやうとしたのである。彼等がイエスを仰いで師としたのは其の教に全然信服したためでなく、彼等が豫てから有つ理想の型にイエスが一番よく當てはまると思惟したからであつた。それは社會の現存組識を革命手段を以て破壞し、彼等が豫てから計畫した新組識に改造する事であつた。それにはロマの政權が邪魔になる。又之に依屬するエルサレムの祭司階級が邪魔になる。それ故暴力を以てロマに對し叛亂を企て『神の民』の獨立。ダビデの盛時に復興する事であつた。

イエスは實に社會の改革者であつた。然り、彼は大革命家であつた。然し乍ら、イエスの建設し給ふ神の國は

此の世の國ではない。

それ神の國は飲食にあらず、義と平和と聖靈によれる歡喜とに在るなり。（ロマ書一四・一七）

である。眞の神を知り、其の聖意を行ふ國、心からなる敬虔、公正、平和、友愛の精神的社會である。かやうな神の國は外なる私有財産制度の改廢、又は他國の帝國主義の排除、國民的獨立の確保、更に又自ら帝國主義を實行して其の民族の發展、大衆の物質的繁榮を計ることと全然異なる。いくら外側なる社會制度を改めて見ても、人の心が革新されずば、眞實人間らしい社會は生じない。いくら外に發展し、物に豊かでも人の心の奥底に潜む罪が除かれずば。そこから流出する邪毒は一層激しくなる。人心の根本的革新、是以外に善き社會は出現しない。而して人は自ら自分の心を一新さすことは出來ない。只神のみ之を爲し給ふ。さらば我等は神の聖意に絶對に服從すること以外、其の途はないのである。

神の聖意に絶對に服從することである。自分が劃策した理想を實行する事ではない。我等の心全部を神に献げ全身を神の御手に委ねることである。『人は二人の主に兼事ふること能はず』（マタイ傳六・二四）である。神が與へ給ふ人間の最高最上の寶『價たかき眞珠』を得るためには『往きて有てる物をことごとく賣りて買』はねばならない。（同一三・四六）。イエスは云ひ給うた。

人もし我に從ひ來らんと思はば、己をすて、己が十字架を負ひて我に從へ。己が生命を救はんと思ふ者はこれを失ひ、我がために己が生命をうしなふ者は之を得べし。人、全世界をまうくとも己が生命を損せば何の益あらん。又その生命の代に何を與へんや。（マタイ傳一六・二四―三六）

と。神の國人類の仰望する理想の社會は、全身全靈全念を献げて神に仕へる時、神之を我等に來らせ給ふ。

『なんぢ心を盡し、精神を盡し、思を盡して主なる汝の神を愛すべし』これは大にして第一の誡命なり。第二もまた之にひとし『おのれの如く、なんぢの隣を愛すべし』。律法全體と預言者とは此の二つの誡命に據るなり。（同二二・三七―四〇）

實にイエスは『ダビテの子』メシヤとして之を完うするために來り給うたのである。

われ律法また預言者を毀つために來れりと思ふな。毀たんとて來らず、反つて成就せん爲なり……我なんぢらに告ぐ、汝らの義、學者、パリサイ人に勝らずは、天國に入ること能はず。（同五・一七、二〇）

神を愛し、人を愛するところの愛である。全心を以て神を愛し神の聖意の實行として萬人を愛すること、之が律法と預言者である。之を行ふことこれが神の國に入り得る者の義である。爰に愛と云ふはギリシヤ語のアガペーの譯であつて、此の語はフヰレオ、又エロスと異なり人間自然に有つて生れた本能的又は肉慾的愛情を云ふのではない。如何に美はしとて血族の親愛、男女の戀愛、友人間の友愛と異なる。まして己を愛する者を愛する利己的愛ではない。

なんぢ己を愛する者を愛せばとて何の嘉すべき事あらん。罪人にても己を愛する者を愛するなり。汝等おのれに善をなす者に善を爲すとも何の嘉すべき事あらん。罪人にても然するなり。なんぢら得る事あらんと思ひて人に貸すとも何の嘉すべき事あらん。罪人にても均しきものを受けんとて罪人に貸すなり。汝ら仇を愛し、善をなし、何をも求めずして貸せ。然らばその報大ならん。かつ至高者の子たるべし。至高者は恩を知らぬもの、惡しき者にも仁慈あるなり。汝らの父慈悲なるごとく、汝らも慈悲なれ。（ルカ傳六・三一―三六）

神の國に入る者の義である此の愛は單純な人情愛ではない。其の本質は感情でなく、意志である。新なる善なる意志である。自分の全生涯の方向を最善に決定する意志である。即ち、我等の生涯の基とし、其の方向とし、目的として父なる神を認め、全生涯を擧げて之に仕へ、其の聖意を實行する事を我等の生涯の目的とする意志、之が神を愛する愛である。而して『汝らの父の慈悲なるごとく、汝らも慈悲なれ』と云ひ給へる如く、それは又人を愛することでもある。神か凡ての人を偏り視給はず凡ての人の靈魂に無上の價値を認め給ふ故に、神の聖意

の實行として神が愛し給うやうに我等が萬人を愛し、其の人格を尊重する。

されば神の國は社會組織の改造になく、心の方向轉換である。社會惡に對しては暴を以て暴に報ゆることでなく、人に對しては惡に善を以てする事である。

われ、更に汝ら聽くものに告ぐ、なんぢらの仇を愛し、汝らを憎む者を善くし、汝らを咀ふ者を祝し、汝らを辱しむる者のために祈れ。なんぢの頰を打つ者には他の頰をも向けよ。なんぢの上衣を取る者には下衣をも拒むな。すべて求むる者に與へ、なんぢの物を奪ふ者にまた索むな。（ルカ傳六・二七―三〇）

どの位之が現代の社會闘爭精神と異なる事よ、現代の社會改革者がマルクスに從ひ、イエスを極度に嫌惡するのは之をきらふからである。イエスに從つては彼等が企圖する社會運動は出來ない。それ故此等の社會改革家は早晩イエスに失望し、彼から離反するのである。

彼等がイエスに失望し、離反するに至つた危機は、エイスがガリラヤで群衆の大熱狂を受け給うた時であつた。それは洗禮者ヨハネがヘロデ・アンチパスの暴虐の犧牲となつて殉教の死を遂げたとの報がガリラヤに傳はり、人心極度に激昂した時であつた。民衆の眼はイエスに向けられた。さればイエスが彼等を避け給ひしにも拘はらず、イエスを尋ねて來る者五千人以上に及び、此等の群衆の中に革命氣運が盛であつた。彼等は數日飲まず食はずの有樣であつた。

イエスは之を見て憐れみ、彼等一同を集め、彼等を教へ、天を仰いで謝し、奇蹟を以て彼等に食を與へ給うた。果然大なる熱狂が群衆中から起つた。

人々その爲し給ひし徴を見ていふ。『實にこれは來るべき預言者なり』。（ヨハネ傳六・一四）

之を見て取つた革命家たちは好機來れりとし、無理にイエスを奉戴して王とし、革命を起さうとした。

イエス彼らが來りて己をとらへ王となさんとするを知り、復ひとりにて山に遁れ給ふ。（同六・一五）

彼等はイエスを追うて來た。イエスは故意に難解な言を以て彼等を追つ拂ひ給うた。

弟子たちの中おほくの者これを聞きて言ふ。『こは甚しき言なるかな。誰か聽き得べき』……斯において弟子たちのうち多くの者かへり去りて、復イエスと共に歩まざりき。（同六〇及六六）

多分ユダがイエスに失望し始め、反逆の心を胸に懷くに至つたのも此の時からであらう。（第六四節）イエスが敵の手中に陷り、絶對絶命の極に達し給うた時、忽ち大能を發揮して敵を粉碎しメシヤたる實を顯し給うであらうと豫期した者も、イエスが少しの抵抗をも試みることなく、むざむざ己を捕ふる者に身を付し給うたのを見て彼等はイエスを見限つた。然るにイエスは親しき弟子たちに言ひ給ふた。

我が父に請ひて十二軍に餘る御使を今あたへらるること能はずと思ふか。もし然せば斯くあるべく錄されたる聖書はいかで成就すべき。（マタイ傳二六・五二）

『斯くあるべく殘されたる聖書』とは、イザヤ書第五十三章のことである。その第七節に、

かれは苦しめらるれども、自ら謙りて口を開かず屠場にひかるゝ小羊の如く、毛をきる者の前に默す羊のごとく、其の口をひらかざりき。

此の絶對無抵抗、只神の聖意への絶對信從、その結果なる十字架の慘ましき死、これに由つて人類の社會に大革命が生じ、人類の歴史に新らしい神の力が入り來たのである。然かもニーチエが嘲つた此の『奴隷道德』に世の軍國主義者、社會革命家は堪ゆる事は出來ない。イエスは常に彼等から十字架につけられ給ふ。（以下次號）

（第九三頁より續く）

四名の教友は、裏切の友が忠言を容れて悔悟せし話淺薄なる社會的基督教の起りし理由、歐米の信仰衰滅形式教育の悲觀的結果なる羽仁女史の視察談を傳へ聞きし話、基督者は此の世事件に對し預言と歴史とを考へて、義しき態度を執るべき事教會信者の無教會主義批判は凡て見當違ひの事、原動力たる神に確實に賴る者は信仰の動搖を見るも遂に安全に返るものなる事、等の實驗を話し心を一にして祈つた。余は彼と是とを對比しイカニ此世と神の國との異るかを痛感した。十時星を仰いで歸宅。

イエスの權威に就て（下）

森本慶三

第三、進んでイエスは、偉人よりも又自己の言行よりも更に偉大なる證明を提出し玉ひました。卽父なる神御自身の言であります。これぞ絕大絕對の證明と言ふべきであります。神の言とは何でありませうか。我等は人の言を聞く樣に誰でも又何時でも、自由に神の言を聞き得べきものではありません。イエスは言ひ玉ひます。神の言は外ではない。聖書そのものであると。聖書は皆神の感動による聖き人の書けるものであつて、其目的はキリスト、イエスを信ずる信仰によりて、救に至らしむる智慧を與へるものである（テモテ後書三ノ十五、十六）といふのであります。聖經こそ實に誰人も聽き得べき天來の聲であり、何者も見得べき神の心の御姿であります。

イエスがこゝに擧げ玉ひし聖書は勿論舊約聖書でありますが、これは恰もヨハネが預言者偉人の代表的であると同樣に、廣く各國各宗の經典教書の典型といふべきであります。何れの世、何れの國、何れの宗教にあつても所謂聖き人が其高潔なる眞心に、天よりの靈感を受けて語り綴りたる言辭は實に尊貴なるものであつて、其内には吾人が神の示として多大の敬意を拂ふ價値あるものが相當にあるものです。其眼目は結局人間最高の理想と、それに達する途卽救を說いたものであります。その救を與ふものが卽キリストでありますから、舊約聖書を始め各國各宗の經典を精讀玩味心解すれば終にキリスト殊に其十字架の贖にまで到達せざるを得なくなると思ひます

我道友高田集藏兄は、周易の上に聖書的眞理を味ひ、その六十四卦中「山地剝」䷖にキリストの十字架を、又その次の卦「地雷復」䷗にキリストの復活を當てて解釋されて居ります。又佛敎の六字の名號、或は法藏比丘の十八題にしても、これ畢竟我等のよつて救はるべき御名の提唱でありませう。實にイエスの生涯こそは舊約聖書は勿論、其他の經典を解する最良の鍵であると思ひます。六十六卷のバイブルが皆キリストに集中する如く

凡ての經典の神秘奥儀もイエスの苦難によりて始て其眞意を鮮明にすることが出來るといふは實に不思議といふべきであります。これは決して誇張して言ふのではありません。淺薄ながら我等の經驗に於ても、我等は各種の經書典籍を味ふこと深ければ愈多く其感を强くします。私は窃に思ひます。敬虔博學なる基督信徒によりて始て世界各國各宗の聖典は、その深義精髄を啓發さるゝのであらふと。この聖書は我に就て證するものなり（ヨハネ傳五ノ三九）とイエスの言ひ玉ひし通りであります。

聖書を學んで僅にその高き道德訓をのみ讃嘆して、イエス御自身の神性と權威を認めぬのは、門に入て堂に上らざるものであります。

第四、イエスは尙も進んで自分の教の神より出た權威を示さんとて、「人もし御意を行はんと欲せば、此教の神よりか、我が己より語るかを知らん」（ヨハネ傳ノ十七）と語りて、人々各自の道德心に强く訴へ玉ひました。これぞ何人でも又何時でも自身親しく實驗し得るところの容易にして、しかも有力なる檢査法であります。

必すしも聖賢の書を讀ますとも、哲人の言を聽かずとも、又深く聖書を學ばずともよろしい、身躬ら己が心に問ひ、行を閲して吾果してよく神意に適ひ居るや否やを考へ見れば足れり。さらば何人も終に神の前に自己を罪人として投出し、主よ我を憐み玉へと言はざるを得なくなるに相違ありません。其こゝにまで至らざるは畢竟未だ彼が神意を實行せんと努力すること淺く、又聖書に示さるゝが如き最高の道德標準を以て自己を照したことがない爲に外なりませぬ。人が一度眞面目に神意を實行せんと勉めて自己の罪過荏弱を自覺し來るとき、始てイエスの救主たる眞價を了得し、彼のキリストたる權威に打たるゝに至りませう。己を堀り下ぐること深き程天上の星は益其輝を增して來ます。イエスがこゝに提供し玉ひし試驗法こそ、最手近く最簡明に又最有効なる途であります。道は近く汝の口にあり汝の心にあり（ロマ書一〇ノ八）。平凡なる日常生活の中にありて、道德的努力と熱實なる求道心のあることが必要であるといふのです。

以上はイエスの神性と權威を立證せんが爲に、イエス

御自身の擧げ玉ひし四通りの途であります。これ以外にも尙あるでせうが、これ丈でも充分であると思ひます。實にイエスは科學的にも哲學的にも、道德的にも宗教的にも何れの方面より、探りに探り檢べに檢べても、苟も誠實謙虛の心を以てせば、必ずや終にイエスは主なりとの結論に達し得べきものであると思ひます。彼は決して誠意を以て彼を檢ぶるものを拒み玉はず、又之を忌ひ玉ひません。實驗を尊ぶトマスには其實證を示し、思索を主んずるヨハネには長壽を賜ひて益深く探らしめ、實行を力說するヤコブには愈高き道德を敎へ、信仰を高調するパウロには心ゆくまでに大なる恩寵を味はしめ玉ひます。彼を學ぶことは天然を究むるが如く廣くして興趣盡きず。神を識るが如く愈高くして止まる處を知りません。彼は智識の無盡藏なり（コロサイ二ノ三）。彼の愛は其廣さ、高さ、深さ測り知り難し（エペソ三ノ十八）。と博學パウロをして驚嘆せしめざるを得ざりし程であります。顏淵嘗て孔子を贊して曰く「仰レ之彌高、鑽レ之彌堅、瞻レ之在レ前、忽焉在レ後」と、況やイエスに於てをやです。

柏木通信（第廿七信）

齋藤宗次郎

柏木の近狀　內村桂子さん（五歲）が、札幌なる平和の家庭にあつて描いた可愛い少女の自由畫を子供之友誌上に見た。優しき線に心の閃きが現はれて一種の力を感じた。天眞の作は凡て貴い。祖父先生の天上の喜びも察せられる。內村全集編輯の命降りてより着手の春、初刊の春、續續の春と三たび春を迎へた。然も健康の身を以て之を迎へた。かくて此秋は完結を告ぐることゝ思へば希望は衷に湧き、目前に輝き將來を暗示して、信仰と勇氣と忍耐の恩賜に預る身の深き光榮を覺える。此一ヶ月も苦難の多きを感じた。編輯會議を開くこと二回、委員の智慧を絞つても、進み得る道程は知れたものである。行き詰りの最後の解決は何時も神樣御自身である。校正も依然として難きことの一であるが、基調配列等の考案に頭を碎く同僚の苦心には同情敬服の涙なきを得ない。鷄鳴を聞いて寢に入るも安眠成らずして更に翌朝の業に就くが如きは幾度なるか知れぬ。又他の同僚は病める三兒を夫人に委ねて日々通勤、一個の炭火より僅かに足底に暖を取つて面壁七八時間に及び、視力の恢復を庭前の

綠樹に求むるを見て思はず相共に笑ふこともある。されど是皆イエス御自身の爲し給ふことである。尙岩波出版部に於ける編輯並に校正の努力精進の狀を聞いて眞に尋常事ならざるを思ふ。後庭の梅花開き瑞香蕾を含み、クロツカス新芽を現はして冬の寂寥は次第に驅逐されつゝある。日曜日の講堂は柏木日曜學校、教友會、淺野氏聖書會の集會にて朝より夕まで神を讃美し神に祈り神の福音は說かる。それに聖書を探らん爲のギリシヤ語研究會もあつて誠に恩寵充溢の態である。地人の密なる關係を知る人は多大の興味を以て之に對するであらう。

雪原を行く　一日廿二日東京降雪あり、積ること數寸東北產の余に取つては古里に歸りし思ひがして甚だ懷かしくあつた。都市の屋瓦に浮き出す四角五角の縞模樣と車輪の泥に塗るゝ路傍の小景のみに眼を傾け居る間に消え去られんは實に惜しい事と思ふた。そこで分秒に時の價値を感ずる業務の間から、貴重の二時間を割き出して足を郊外高井戸の地に移し、水道堤の人跡稀なる雪原を多摩秩父の連峰を前にして進んだ。其光耀其淸淨其美觀の稱贊を壇にして、此處にも亦蘇生の愉樂を感じた。灰色の都會風景に死の影の漂ふに比して將に新天新地を迎ふの喜びであつた。武藏野特有の櫸樫椎竹等の樹林の點綴するを遙かに眺めつゝ行く間に、蘇武の苦節を想ふと共に余が三十餘年前信仰の苦鬪に際し、獨吹雪の河畔に跪きて神の國を祈りし當時を偲ぶこと切であつた。何時しか余は大宮前に達し盲人なる教友秋元梅吉氏の門に入つた。氏が單に日本支那印度に止らず全世界の盲人に對する愛心の濃かなるは目明きの我等の容易に推知し得ざるものがある。氏が昨年雪國北海道並に靑森縣の可憐なる盲人に對する同情禁じ難く二百數十部の點字聖書を配布贈與することゝなつた。其結果之を熟讀せし人々の心眼開けて不平は滿足に、煩悶は歡喜に、悲愁は感謝に變ずるに至りし尊き實驗を綴つて送り來れる多くの感謝狀に接し、氏は之を讀んで水の上に投げしパンが多くの日の後ならで、まのあたり百倍千倍の實のりを示されしを見て聖靈の恩寵に感激せる事實に深き興味を持ち大なる敬意を拂ひ、愛の力を嘆美して我家に歸つた。

日曜の集會　毎會三十名內外の出席、人工的の何物もなく只主に從つて信望愛に全靈全心を躍らすのみ、我等の誇は十字架の外になく、榮光を凡て神に歸し奉る。

一、內村全集と聖靈　山桝儀市
一、全集の讀者(岩手縣に於ける)　水野辰三
一、洗禮ヨハネの使命　永井久錄
一、ヨブの苦難　峯岸輝男
一、復活の證明者たる基督者　大賀一郎

一、『汝等悔改めよ』　山田總一郎
一、自然界に現はれたる神の惠　鈴木敏元
一、神の絶對的主權　山田忠信
一、イエスの足跡　齋藤宗次郎

湯河原の三時間　余は一つの用務を帶んで、此地に暫時靜養せらるゝ内村靜子夫人を訪ねん爲一月十三日朝東京驛を發した。掌中の聖書宙外の天然新聞紙上の世相に心を注いで、居ながら天涯地角を翱翔し、再臨の日に歩みを進むる宇宙の輝く運命を讃美するの歌を口吟みつゝある間に目的地に達した。背後に綠林を負ふ伊藤旅館に入つて恩師夫人に面晤し、留守宅の樣子編輯會議の模樣扇ヶ谷感謝會教友會の集會等に數々の神恩を報じて喜びと感謝とを共にした。此地は我等の忘るべからざる多くの歷史的事實を持つて居る。田園詩人蘆花氏の默想執筆も其一つであるが、最も顯著なるは幸德秋水氏が刑場の露と消ゆる前。天野屋旅舍の一室に於て基督抹殺論を草したること、其後同所に於て内村鑑三先生が聖書の研究と尊き信仰の體驗によりて、基督の生命を明かにするの書を編まれしことである。軒に薫る老梅に對して一は悲哀を投げ一は感謝を捧げたであらう。枕を音づる溪流の樂に對して一は世の不公平を憤り一は神の大能を讃美したであらう。當時我國人の多くは社會主義と基督教とを混同し、正確の判斷をなし得ざるものであつた。中江兆民氏の感化を受けて無神無靈魂の論據に立ち有限の地と肉とに至大の目標信賴を置くマルクス主義に人間の思想を貫徹せんとしたる秋水氏は何を夢みしか、該書を公にして自ら敵視せる基督教の不變の基礎を立證する結果を齎したるは奇といふべきである。爾うして圖らずも同旅宿に身を托し祈を以て基督に獻じ人類に寄せたる内村先生の思想信仰は、今や全集となりて世に頒たれつゝある。此れ等内容の相反せる二つの事蹟は審判の日を待つまでもなく、近き將來に於て我同胞が基督の十字架の生命に新生の感謝を奉る時には平和の福音と破壞の思想との天地の差を認め、それと同時に湯河原の溪谷が新世界出現の爲に一時神と惡魔との戰場たりしを記念せらるゝであらう。余は紅白の梅花綻び初めし塀の上に活歷史を彫む二つの室を眺めたる後、見晴し臺まで此等のことを考へつゝ往返して正午頃夫人に別れを告げて去つた。

洗足會　一月廿六日、今夕の會場たる九段高山氏宅に向ふ途上、二臺のタンクが砲口を露出し噪音を放ちて驚進するを見、麴町某書店に全部共產主義の幾千の本が毒々しき赤色を呈しあるを見、數基の銅像が憂苦暗涙を示す尼港事件の記念塔を見て夕暮平和の視筵に連つた。十

（第八八頁へつづく）

或る青年に

○○に採用される事になつた由、御芽出度う。澤山の學生が就職のために心を苦しめて居る今時、何と云ふ幸福でしよう。之で落着いて卒業試驗が受られるでしよう。永い間の學生生活と袂別する記念のため、どうぞ掉尾一振、立派な成績を得て卒業し給へ。

君が○○に採用されるやうになつたのは勿論君の力です。他人の紹介や、懇望や、ひきがあつたからではありません。どんなに君の知人が君のために骨を折つたとて君が役に立ちそうもない、つまらない人間であるならば決して採用される筈はありません。此の事は大切な事柄です。今後社會に出て働く時、自分の實力に信頼せず、他人のひいきに頼つてはなりませぬ。此の後一層修養を懈らず、學んだ學問を放擲せず、天下のため有爲の人物となるやう心懸けて下さい。

然し乍ら、君が此の度採用されたについて、それは全く君獨りの力であつたと考へたならば、大間違ひです。君を今日まで養育し、學校に入れ、充分の教育を受けさせ、更に君の就職について一方ならぬ心配をされた君の御兩親の恩を忘れてはなりませぬ。學業について君よりもつと優秀な者もあつたであらうに、どの會社でも君を採用する事に内定されたと云ふことについては、君の背後の家庭の様子、親の德があつたと考へねばなりませぬ。君が獨力で學校を卒業し、獨力で就職し得たと思ふならば、それは自惚となります。そして他日大き失敗の原因となります。いつも自分の今日あるは父母の恩、師の恩、友の恩である事を忘れてはなりませぬ。

更らに此の際私は君に注意を喚起し度い一事があります。それは自分を離れて、君を採用する事に決定された○○の立場に立つて自分を考へる事です。君は數會社の採用試驗に通過し得たが、中で○○が一番善さそうだと思つたからそこに就職しやうと決心したのだと、只自分の立場ばかりから物を考へたならば思慮が足りません。○○の立場になつて考へて見なければなりません。○○

で君を採用する事に決定されたのは、勿論君の人物に將來見込があると認められたからではあるが、又一つには君に對する好意によつて、數多くある志願者から君を採用することに決定されたわけです。君に對する〇〇の此の好意を充分に感謝し、就職してから忠實に勤めて其の知遇に報ゆる覺悟がなくてはならないと私は思ひます。

多分先方で君を採用に決せられた理由の一つには君がかやうな性格の人だと見られたからであらうと思ひます。何よりも大切なのは學校に於ける優秀なる成績、又はどの會社の採用試驗をも悉く通過し得る才能よりも、此の誠實、報恩、義務の觀念です。どうぞ君の一生をそれを以て貫くやうに心懸けて下さい。

現代は資本主義制度の時代だと云ひ、人々は其の害惡を叫び、之が倒壞を企てて居る者が多くあります。從つて資本家に忠實であることは社會の罪人であると云ふ風に考へる者もありますが、それは大きな間違ひです。資本を私有する事、之を運用する事、それ自體は惡でも又善でもありません。之を私有し、運用する精神に由つて惡ともなり、善ともなるのであります。例ば此の前も話しましたやうに、其の日の食にも困つて居る者が多數に有る時、私が或る工場を私有し、此等の人々に職を與へるため此の工場を經營したならば私は社會に對して一つの善事をなしたと思ひます。若し之を經營する目的が私慾に在り、多數の勞働者を酷使し不正の製品を賣り付けるためであらば、私の工場經營は惡です。

かやうに現代の資本制度其の物が惡いのではありません。制度は人が設けたものであります。人に由つて善くもなり、惡しくもなります。例ば、近ゴ我が國でも非常に發達を遂げた株式會社制度について見ても、此の制度が存する故に僅少なる貯蓄をして居る人々も大會社の株式に應募して其の株主となり、資本家となり得られます。又大事業を經營する能力が充分あり乍ら、身自ら資本を有たないため空しく櫪に臥した天才兒も大會社の重役となり得て思ふ存分に其の天賦の能を發揮し得られます。そして社會としても此等の零細なる貯金を集めて大資本とし、用ふる所なかつた才能を適所に用ひ、大事業を經

營せしめ、其便益を豐かに享受し得ます。鐵道、汽船、電氣、製鐵、紡績等數へることは出來ません。

然るに此の株式會社なるものは信用に由つて成立し、信用に由つて存續するものであります。若し重役に信用がなかつたならば株主は安んじて之に資資本を託する事が出來ません。從つて株式會社は成立しません。株主が常に重役の誠意を疑ひ、其の事業經營に干渉したならば重役は思ふ存分に働くことが出來ません。從つて現今のやうな大事業は經營不可能であり、大株式會社なるものは存在し得ません。株式會社が近年非常に發達したのは一般に產業上信用が增し、誠實が認められた結果であります。若し今でも夥多しくある惡德重役の背任行爲が一層盛になれば、今の資本制度は益々惡化し、その維持は困難となり、昔の產業狀態の方が遙に善くなります。

昔は事業の規模小さく、其の範圍狹く、何れも其の附近の人々を相手として經營されて居ました。それ故少しでも不正をすれば直ぐ相手に知れ、其の惡事は直ちに制裁されました。然るに今では分業が非常に復雜となり、各自のなすことは全體の一小部分となり、之と實際其の製品を購求する者との距離が遠くなつて、何處に不正が行はれたか容易に知れなくなりました。それだけ各人が不正を働く餘地が廣まり、且つ各人の社會に對する道德的責任が加重したわけです。世が進むにつれ、大事業が起るにつれ、分業が盛となるにつれ、インチキが盛となり、其のためどの位社會全體が惱んで居るでせう。產業不振と云ひ生活難と云ふも根本は技術の問題ではありません。道德問題です。制度でなく、各自の責任問題です。各自が眞に義しい人とならねばなりません。

義しいとは一體何に對して義しいことですか。社會に對して義しいのだと云へばわかつたやうでわかりません社會は明瞭な人格者でなく、之に對して行つた行爲の結果は不明です。我等は自分の行爲の外に顯はれた結果を見て自分の責任を計る事は不可能です。心の內に於て神に對して義しくあらば、外萬人に對して義しくあり得ます。いつも神と偕に步む人、かやうな人になつて頂き度いものです。

身邊漫筆

○二月號の發行が定日から後れたゝめ諸所から若しや私が病氣ではないかと問合せを受けて有り難く思つた。後れたのは全く印刷所の都合であつた。私が原稿を締切つたのは一月十日。私はいつも早手廻しに原稿を締切る。それは急用に對しては全くそれに應ずる彈力が私の身體にない事を知つて居るからである。

○然し乍ら近來私の身體に大分抵抗力が出て來た。昨年は一度も醫師の世話にならずにすんだ。人からどう云ふ養生をして居るかと聞かれて、私の養生法は養生をしない事だと答へた。毎日感謝して食物を食ひ、夜は平安のうちに寢る。これが私の養生法である。心中大きな來世的希望が輝く、キリストと偕なる事から來る救の平安がある。これ以上の養生法があらうか。

○數日前島德郎君の長逝を聞いて私の心に何だか大きな空虛が出來た事を感ずる。此の空虛は來るべき御國に於ける再會で完全に滿されるであらう。多分彼も私を待つて居てくれると思ふ。私もそれを樂しみにする。彼は私が大學での最初の講義「英語經濟學」（變な名前だ）を聽いた學生であり、其のクラスで得た私の友人中、最も親しい二人の一人であつた。

○始め私が「思想と生活」誌を出した時彼は何故經濟學に精進しないかと苦情を云つて來た。それから二年、突然大阪から私を訪ねて、自分は佛教に入るべきか基督教に入るべきか迷つて居る。何れがよいだらうと相談しに來た。私はそんな事を私に聞くものではないと斷つた。然るに彼は病氣により信仰に向ひ、それが進行するにつれ信仰も進行し、信仰の進むにつれ、私との交りも深まつた。今長逝の報に驚き、好川增輔君を私の代理として同家を吊問して貰つた。私の傳言に兩親はいたく喜ばれた由、私も聞いて喜んだ。神樣は珍らしい事をなさる。

○「宗教と國家」は品切のところ第二刷が出來た。引續き五部、十部、十八部と申込がある。某大會社から五十部の注文を受けて豫期しないこととて私は吃驚した。第二刷は矢內原忠雄君の好意により誤植三十餘ケ所を訂正し、又山田幸三郎君の教示により、三ケ所詩の譯語を訂正した。私は自分が日本語を知らないのに驚いた。私の譯は丁度反對の意味になつて居た。其の箇所は二五頁、七四頁各第一行及び三九五頁第二行である。謹で訂正します。

（昭和三年二月十六日　第三種郵便物認可）　聖書之眞理　第六十五號

江原萬里著（岩波版）

宗教と國家

――エレミヤ記の研究――

定價一圓八十錢・送料十四錢

第二刷出來、某氏より左記の感想を寄せられた。賞讃は餘りに溢美、著者には過分であつて勿論それに値しないが、反響の一つとしてこゝにのす。

エレミヤ記の研究本日讀了致し、始めてエレミヤの人となりと其の偉大とを知る事を得、感謝に堪えません、現下の日本に對し斯る名著を世に送られし事に付きましては神の大なる御意の存する事あるべきを信じて已みません。斯る名著が貴下の手に依て成されました事は我等として感謝に堪えません。多分我等が在る間此の日本に於ては此の著以上のエレミヤ記の研究は斷じてなかるべし此の書何時か日本の潔めの爲大なる役割を擔ふ事だらうと信じて疑ひません。

內村鑑三先生逝去三年記念講演會

三月二十六日（日）午後二時より東京市內朝日新聞社朝日講堂（有樂町附近）にて開催。（入場料二十錢）。

午後六時より晩餐會（會費二圓五十錢）。

尙同二十八日（火）午後六時半より柏木九一九今井館にて記念會の催あり

聖書の眞理定價（送料共）

一部	二十錢
半年（六部）	一圓十錢
一年（十二部）	二圓十錢
海外一年	二圓六十錢

拂込は聖書の眞理社（振替東京六三三七五番）へ。獨立堂にてもよし

昭和八年二月廿八日納本
昭和八年三月一日發行

編輯印刷兼發行人　神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷三四三　江原萬里

發行所　東京市澁谷區向山町九七　聖書の眞理社

印刷所　東京市神田區三河町三ノ四　今井印刷所

發賣所　東京市淀橋區柏木四丁目九四六　獨立堂書房　振替東京一九四八番

【本誌定價二十錢】